

宗門の前途

溝田在庵

今年第六百九十六年の宗祖降誕の嘉辰を迎へ奉るに際し、益々宗門の發展を計るべく、此處に宗門の前途てふ問題の下に於て、述べんと欲するものあり。

此の問題たるや、歸する所は皆一かれども、其の方面に於て多種多様あり、故に是れを委悉に述べからず、依て吾人は僧侶界の中に於て、特に青年僧侶に就て、自己の素懷を述べんとするものなり。

夫れ宗門の盛衰は、能弘者たる、僧侶の如何に依りて、見る事を得るあり、若し宗教家としての眞の僧侶あるかくんば、奈何にして宗門の安寧を保つ事を得べきや、問、眞の僧侶とは如何あるをか之を名く、謂く、爲宗爲法以て捨身弘法の者は眞の僧侶あり、問、然らば寺門經營に力を注ぎ布教傳道せざるものありとせば、是れ全じく僧侶

と云ふ事を得べき歟、答、然り、然れども是れに兩途あり、一概にする事を得ず。問、然らば、如何なるものか、答、一には宗門の發展を計るべく寺門經營を先にし、斯く根底を作り、而して布教傳道に従事せんと欲するものあり、又寺門經營にのみに一生を終る者もあり、二には自己の本心を失する者あり、自己の本心とは如何なるものか、謂く自己僧侶たる事を忘れ、在家に非ざる事を知て、而も其の行爲に於て、何等在家と選ぶ處なきものあり、其の行爲たるや或は農を致し、金銀財寶を積み満足を得る者のあり、此等は以て僧侶と謂ふ事を得べきや、所謂宗祖の『人に似たる畜生なり』と宣ひしに當らずや、而して、此等の得たる金銀財寶に於て、果して堂宇の莊嚴に資するや否や、是れ多くは妻子等を扶養する資たるべし、僧侶とは和合のものあり、而して僧侶の所作たるや、多種あり、或は寺門經營に従事するあり、或は布教傳道に従事する説教師あり、演説家あり、又未輩僧を教諭する宗學者あり、斯くして、宗門

は立ち行くものあり、故に分業的にして、自己の従事すべき事に當つて忠實なる、爲宗爲法の念厚き者の多きを以て、宗門の發展とは云ふなり、若し僧侶たるの本意を失し、金銀財寶以て、妻子の衣食住の資とあすが如き僧侶の、増加したるあれば、其の宗門たるや憫然の至りあり。吾人が宗門の前途てふ問題の下に於て、青年僧侶の、自覺、信念、奮勵を肯かさんと欲する所以のものは、此處に於て始めて起れるなり。

僧侶界の中に於て、自己より進んで僧侶とありし者と、父母に勧められて僧侶となりし者との二種類あり、前者の中に於て又種々あり、或は是非善惡を辨へず、子供心に唯美衣美食を得んとして僧侶となるものあり、或は父母に別れて世の無常を感じ、僧侶となりし者あり、又後者の中に於ても、家貧しきが故に出家せしものあり、或は一人出家せは六親成佛す等の事に依り、出家なさしめらるゝ者あり、或は父僧侶にして子の又僧侶とあるが如き、各自面の異なるが如く其僧侶とある上に

於て、境遇と思想の異なる上に於て、千差万別あり。從て又僧侶となりし後に於ても、師の如何により境遇の如何により、又自己の思想の如何によりて進むべき方法等を異にす、然れども僧侶となりし上に於ては、如何なる境遇思想ありとも、唯爲宗爲法の本心を失する可からず、是れを失するは僧侶の皮を着たる俗界の魔師あり。

學生時代に於ける僧侶の所言奈何と云ふに、多くは熱あり、混ある爲宗爲法の法器となるべき、たのもしき事どもなり、譬へば我は學者として立ち宗門教學の發展を計らんとす、或は余は布教傳道に従事し、以て衆をして安心立命を得せしめん等の言の如くなり。然れども修了後の彼等に於て果して然るや、甚だ以て疑はしき事なり。而して其の爲さざる者、果して又境遇の爲さしめざるに至りしや、將た又時宜を得ざるが故に爲さざるか謂く吾人をして云はしむれば、多くは然らず、彼等の所言は空論泡説なるのみ、故に見よ、宗門僧侶にして學窓を出でし者數ふべからず、而も爲宗